

十月四日

今朝より、世田谷村ゼミナールを再開する。三ヶ月弱の休養期間中、参加者がどれ程頭に、そして身体に栄養をつけたのかが知れるだろう。九時スタートだが、秋のプログラムは彼らに提案させるつもり。共通テーマと一人一人の個別テーマを分けよう。今日の舵取りは重要である。

二十一時前迄ゼミを続けた。それぞれのゲートは開けたから、あとは走って貰うしかない。十四時より博士課程の天津、ゼミに参加。天津の言う事はマアマア大人であった。十二時間ぶつ続けで、私も私なりに若い人との会話を通して研究室の将来を考えてみたいと思つたのだが、会話は仲々成立しない。文学部の友岡君のモノおじしない姿勢だけが印象的であつた。早稲田ではここ数年で、一番良い人材を集めたつもりでいたのだが・・・対話は困難だ。特にリアルな場所に於いては。期待する方がお人好しだつたのだろう。教えたいモノがあるから教師をまだ続けているのだが、教える方には、それを聴き分けるだけの素材だつて必要なのだ。しかし、私の言っていることは導師と弟子の關係の如くに、本来通り一辺の大学教育の場などではあり得ぬ、高望みなのである。益々、独人になってゆくばかりだ。

十月五日

十一時前研究室。台北の李榮杰氏来室。台湾の幾つかのプロジ

エクトについて。その後、幾つかの相談。

丹羽太一君が重い腰を上げて淵瀬問答のページをオープンしたので見てみる。新しい場所についての理屈が述べられていた。要するに丹羽君にとっては、この問答が在るコンピュータ内の場所が社会との接続点なのだろうが、その場所の意味と、自分の不自由な身体への考察が述べられていた。私が丹羽君や彼の友人の千村君、そして藤沢の高橋さん、それに山口勝弘先生といった身体に痛みを持つ方々に大きな関心を持つ由縁は、私の身体も確実におとろえてゆくであろう事の予感があるからだ。別に私だけが抱え込む問題ではない。万人共通の問題である。だから丹羽君のこのページは私にとってある種のオペレーションになるだろうと期待している。一言一句味読したい。人間は愚かなもので、自分の身体が弱くなつてみないと、身体の弱い人がリアルに抱える問題を理解できぬ。又、その独自性の価値を本当に理解する事は出来ない。私もそうだった。そして、弱い人独特の感性や感情のあり方が在るのを今は知る。その形式は今の時代にとても大事なものだと思える。本当はズーツと昔から大事な事だつたのだが、少なくとも私は気附かなかつた。